

## 大学生の聴覚障害者におけるスポーツ活動に関する研究

佐川 晶

障害差別解消法の施行など、近年、障害者に対する社会状況が変化している。しかし、聴覚障害者のコミュニケーションの在り方に関する世間の理解はまだまだ乏しい。特にスポーツに関しては、パラリンピックの認知度が上がっている一方で、聴覚障害者が参加できないことはほとんど認知されていない。その中で、ろう学校や通常校に通いながらスポーツを行っている学生がいる。そこで本研究では、運動部や運動サークルに所属している大学生の聴覚障害者に焦点を当て、彼らの語りから、コミュニケーションが必須であるチームスポーツや個人でのプレーにおいて、当事者達がどのように練習や試合に取り組んでいるのかを探る。その上で、スポーツに関わるようになった動機や、周囲との関係性を調査する。そして、聴覚障害のある大学生が今後どのようにスポーツと関わっていくのかを明らかにすることを目的とする。

本研究では、遠隔会議ソフト等を利用し、半構造化インタビューを行った。その際、調査対象者は主に視覚的な情報により判断するということを考慮し、対象者の負担にならないよう調査を行った。具体的には、事前準備として、調査対象者にどのようなコミュニケーション方法をとることが一番円滑にできるかを聞き、インタビュー内容の概要は質問紙として準備し周知した。調査期間は2020年4月から12月であり、調査人数は7名である。

本研究の調査から以下のことが明らかになった。まず、聴覚障害学生のスポーツと関わり方についてである。①スポーツを始める動機は人によって異なるものの、スポーツ活動は彼らの人間形成において重要な役割を果たしている。②彼らを取り巻く環境は必ずしも充実したものではなく、その中で「聞こえない・聞こえる」世界の選択は彼らの「競技との向き合い方」によって異なってくる。③今後どのようにスポーツと関わるかについては彼ら自身の将来の展望が影響しており、ここでは職業選択とジェンダーによる継続性の違いが表れた。④デフスポーツとデフリンピックは密接に関わっており、競技者ならではの問題意識があることが分かった。

また、動機・取り巻く環境・今後の展望という3つの視点から明らかになった中で見えてきたものは、言語的少数者である彼らが多くの葛藤を抱いているということである。特に、調査対象者の多くに健聴者との間におけるコミュニケーションの在り方についての葛藤が見られた。今後、彼らが「聞こえない・聞こえる」関係なく、ありのままの自分としてスポーツ活動に向き合うためにも、長期的に双方向のコミュニケーションを行う必要があると考えられる。

(指導教員 照山絢子)